

【巻頭言】**「五季」と適者生存**

宮部 和幸*

今から30年程前になるだろうか。長野市でのJA経済連関係者との飲み会の席だった。あと数年も経てば、夏場に生き残ることが出来る野菜産地は、北海道や標高の高い冷涼な高原産地だけになるのではないかという話になった。当時は、まだそれほどの猛暑ではなかったし、温暖化についても今ほど騒がれていなかった。だから、このような話題も冗談ごとのように当時は思っていた。

それがどうだろう。2024年は連日猛暑が続き、10月になっても真夏日に見舞われた。10月19日、都内の最高気温は30.1℃を観測し、1875年からの統計開始以来、最も遅い30℃以上の真夏日となった。

いつまでも真夏日（猛暑）が続いたため、高温障害の影響を受けた野菜産地は少なくなかった。一般に、連日35℃以上の猛暑日が続くと、作物の光合成能力は低下し、栄養供給が滞るなどの高温障害を引き起こし、作物の生育に大きな影響を与える。ハウス栽培の場合は、こまめな温度管理がとても重要になるし、特に、トマト、ピーマン、キュウリなど、野菜は高温障害にとっても敏感な品目が多い。

研究室の畑（大学の圃場）でも、トマト、ミニトマトはほとんど実が成らなかったし、ピーマンは小さいうちから赤くなり、小ぶりで硬いピーマンしか出来なかった。同様に（研究室の畑と同列に語ることは失礼なことであるが）、収量が大幅に低下し、出荷できず廃棄せざるを得ない品目を抱えた野菜産地の話もしばしば耳にした。当然ながら、そのことはスーパーマーケットの棚に並ぶ野菜の価格にも影響を及ぼした。レタス、キャベツ、葉物野菜など、品目によっては、例年の2～3倍に価格が高騰したのである。

高温障害は、野菜等の農産物だけではなく、われわれ人間にも当てはまるようである。そもそも夏場は暑くて、昼日向は長時間の農作業が厳しい。そのため、作業時間帯を大幅に前倒し（早朝から夜中に移動）するなど、作業時間そのものを減らさざるを得なくなる。炎天下で生産性を向上させるのは至難の業に近い。

昨夏、徳島の鳴門レンコンの生産者に対してヒアリング調査を実施した際も、生産者は

*当学科教授（みやべ かずゆき）

「これだけの猛暑日が続くと、圃場に向かう気持ちさえも萎えてしまう」と日に焼けた顔をしかめながら話していた。高温は、精神的・肉体的にも大きく影響を及ぼしていたのである。

野菜産地は、高温障害の影響をなるべく受けないように、猛暑に強い品種に変更したり、水の量を調整して少しでも地温を下げるなど、それぞれ工夫をしながら取り組んでいる。ただ、いずれの産地も、高温障害対策にはこれといった決め手がなく、手探りの状態から抜け出しているとはいえない。

ところで、アパレル業界に目を転じると、通常、5月から7月は夏物を、8月からは秋物を展開するのであるが、昨年はどうしたことか、9月になってもショーウインドーには、帽子や半袖シャツ姿のマネキンたちがディスプレイされていた。

それもそのはずである。アパレル業界では、5月から7月を「初夏・盛夏」、8月から9月を「猛暑」として、「春・盛夏・猛暑・秋・冬」の「五季」として、夏物類の販売期間を大幅に延長していたのである（図1）。つまり、長い夏が「四季」の概念を変え、新たに「五季」として捉えることで環境変化に適合していく、それがアパレル業界にとっての「適者生存」なのである。

図1 四季と五季

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
四季	冬		春		夏			秋			冬	
五季	冬	春		盛夏			猛暑		秋	冬		

もはや、こうした高温障害対策は、個々の野菜産地レベルの域を超えているのかもしれない。と同時に産地関係者に卸売業者、小売業者などの流通関係者を加えた野菜産業（業界）におけるフレームワークで対策を講じていかななくてはならないともいえる。いずれにしても、野菜産地ないし野菜業界の適者生存には、アパレル業界にみる「五季」の適者生存から学ぶべき点も少なくないだろう。

今後の気候変動については不透明であるが、ルイス・キャロルの小説『鏡の国のアリス』に登場する「赤の女王」がアリスに発した「その場にとどまるためには、全力で走り続けなければならない」というセリフのように、個々の野菜産地、また野菜業界も、高温障害対策に向けて走り続けなければならない。そうしなければ、わが国の夏季の野菜産地は、それこそ北海道と一部の高原産地だけとなりかねないからである。